

# 「石狩湾系ニシン」平成 28 年度（2016 年度）漁期のまとめ

平成 29 年 4 月 27 日

北海道立総合研究機構中央水産試験場 資源管理部

昨秋から今冬にかけて漁獲対象となった、「石狩湾系ニシン」産卵来遊群の漁獲状況や資源状態について、漁期中の調査結果に基づき次のとおりまとめました。

## 1. 漁獲状況について（図 1） ※2016 年度漁獲量は道庁発表速報値と水試独自集計に基づく暫定値。

昨秋から 4 月末まで（2016 年度漁期）の石狩湾系ニシンの漁獲量は 1,790 トン（2015 年度比 86%）となりました。小樽市を中心とする後志沿岸では前年を大きく割り込んだものの、石狩沿岸では過去最高となった前年の 91%と、今期も好漁となりました。留萌・宗谷沿岸では今期の漁獲もわずかとなりました。沖底、えびこぎ、沖刺し網による沖合域深みでの混獲については 2009 年度以降ゆるやかな減少傾向となり、今期は前年並みとなりました。

## 2. 魚体について（図 2, 3）

漁獲物の年齢組成（尾数）は 5 年魚（2012 年級）が全体の 34%と漁獲の軸となりましたが、石狩方面では漁期後半から 3 年魚（2014 年級）の漁獲が多くなり、漁獲尾数全体に占める割合も 5 年魚と同程度となりました。6 年魚以上の超大型群は今期も序盤の漁を賑わせましたが、漁獲尾数としては前年の半数程度に留まりました。今期の漁獲物の平均体重は 3 年魚の割合が高くなったことをうけ 288g と、前年から若干小さくなりました。

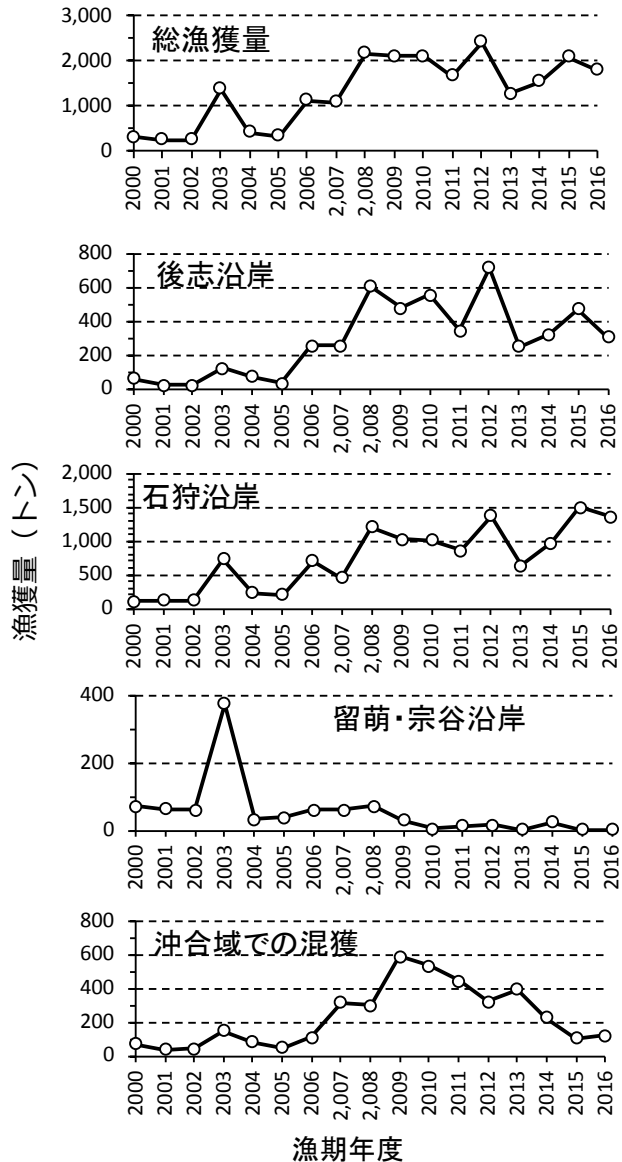


図 1 漁獲量の推移

漁期年度：5/1～翌 4/30. 実質的には 10～3 月の漁獲量が大半をしめる。

### 3. 漁期について（図4）

湾沿岸部では1月中ほとんど漁獲がないまま経過しました。1月末から後志沿岸でようやく漁獲がまとまりはじめ、次いで石狩市石狩区でも漁獲がのびていきましたが、2月に入っても厚田区～浜益区沿岸ではほとんど来遊がない状態が続きました。小樽・余市方面～石狩区では5年魚を主体に2月上～中旬に盛漁期となると、厚田方面でも2月7日前後からまとまりはじめ、下旬にかけて盛漁期となりました。2月下旬以降は、後志では次第に薄漁となっていきましたが、石狩方面では3年魚の来遊が多くなり3月中旬まで好漁が続きました。近年は3年魚主体の来遊となる3月は低調になる傾向がありましたが、今年は3年魚の資源量が多いうえに魚体の成長が良く、2.0寸以上の目合にも刺さりやすかったため、久しぶりに3月にも漁がまとまったという状況です。この3年魚すなわち2014年級の、来シーズン、4年魚としての漁獲貢献に期待をこめ、石狩市では3月中旬以降段階的に早期の切り上げを行いました。

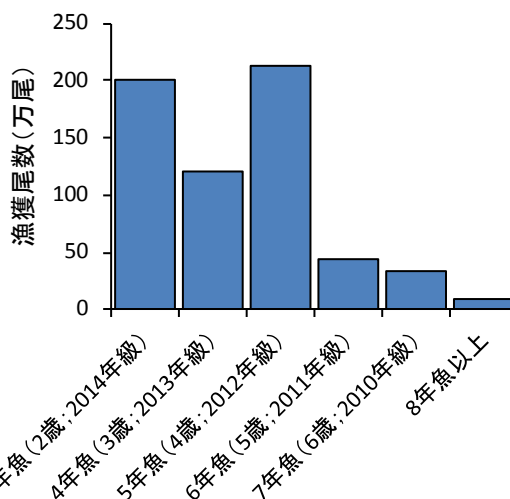


図2 2016年度漁獲物の年齢組成

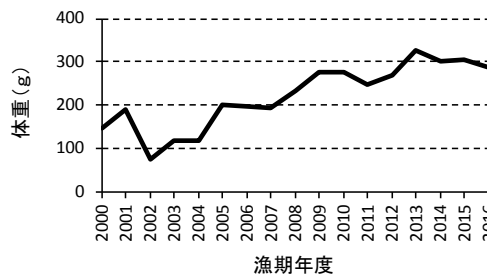


図3 漁獲物の平均体重の推移

### 4. 漁海況について

H25,27年度等にも湾沿岸部への来遊が大幅に遅れましたが、例年こういったケースでも湾沖合の深みにおける刺し網漁業では年末や漁期初めから混獲が続きます。しかし今期は沖合でも序盤は漁がなかったうえに、数の子の成熟もあまり進んでいなかったことから、昨夏以降の成熟の進み具合が何らかの要因で遅くなり、石狩湾近海への来遊時期そのものが一旬程度遅くなったとみています。くわえて、図5のとおり今年の湾沿岸はまれに見る低水温にみまわれ、沿岸漁場に群れが寄りつきにくい状況が重なったと考えられます。これら成熟進行の遅れによる来遊遅れと沿岸域の非常に低い水温推移という二つの要素が、今期の各地の漁況に大きく影響したと思われます。例年であれば5年魚以上は1月末頃には産卵しますが、今期は成熟が遅れ気味で来遊

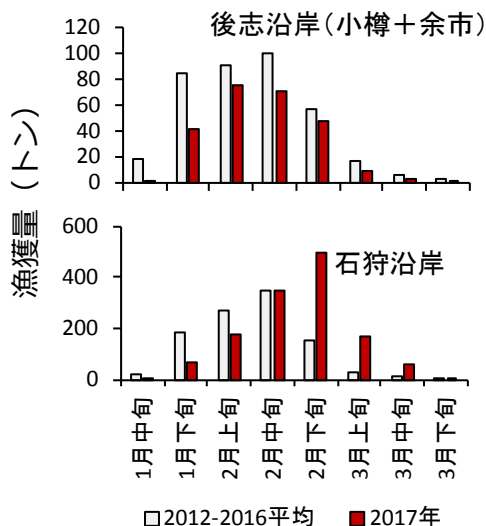


図4 石狩湾沿岸における時期別漁獲量

し2月に入っても産卵が進まないまま，“相対的に”水温の高い後志～新港付近にかけ魚群が滞留したことで同海域では盛漁期となる一方，厚田以北には群れが寄らない状況となりました。水温が2月上旬に底打ちし上昇傾向に入ると（図5），魚群が徐々に厚田側に寄るようになり厚田方面でも漁がまとまるようになりました。しかし，産卵適水温帯とされる4～5℃には程遠く，産卵がなかなか進まないまま厚田前浜に滞留する形となり，同海域では2月下旬が盛漁期となったとみられます。2月末には連日，厚田区前浜から大規模な群来現象が報告されましたので，この頃には4年魚以上が一斉に産卵したものと考えられます。

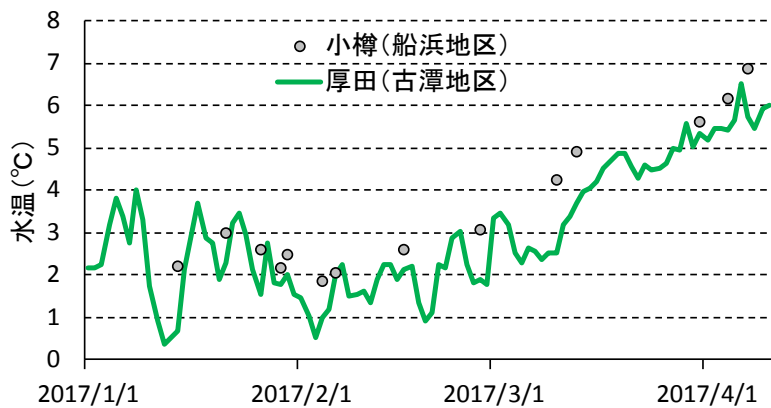


図5 石狩湾沿岸の2定点における漁期中の水温推移。  
（水深3～4mの海底付近）  
小樽地区はSTD，古潭地区は水温記録計による計測。

### 5. 資源状態と来漁期の見通しについて

近年の漁獲の主体となっている4年魚以上の漁獲尾数は約420万尾と推定され，前年（655万尾）の64%に留まりました。今後，資源解析などを進めていきますが，2016年度当初の4年魚以上の来遊資源量としても，漁獲尾数の減少幅と同様に2015年度当初値からは6～7割程度減少したものと考えられます。一方，後半の漁をのぼした3年魚（2014年級）については，近年にはない好漁となったことから，その資源量や来期の4年魚として資源量に期待が高まりますが，上記のとおり，この年級の成長は近年の3年魚に比べ著しく良好で，そのため2.0寸目以上に刺さりやすかったという条件の違いがあるため，まだその年級豊度については見極め切れていない状況です。来シーズンも10月に実施する稚内水試調査船「北洋丸」による留萌沖合でのトロール調査の情報をふまえて判断していきたいと思えます。その他関連の調査も含めましてのご配慮，情報提供など，引き続きご協力よろしくお願いたします。

—お問い合わせ—

中央水試 資源管理部 資源管理グループ  
研究主幹 星野 昇  
Tel. 0135-23-8707